

ハイデルベルク信仰問答より

問 76 十字架につけられたキリストのからだを食し、その流された血を飲むことは、何を意味しているのですか。

答え それは、キリストのすべての苦難と死と信仰の心を受け入れ、それによって罪の赦しと永遠の生命を与られるだけではありません（ヨハネ 6:35, 40、6:53-54）。加えて、それは彼が天におられ（使徒 3:20-21）、私たちは地上にいるのですが、キリストと私たちのうちに住み給う聖霊によって（ヨハネ 6:56）、その祝福された主のからだとますます一つにされ、したがって、私たちは主の肉の肉、骨の骨となり（エペソ 5:30）、私たちのからだの肢々が、一つの魂によって統べ治められていますように、常に、一つの御霊によって生きかつ支配される（Iヨハネ 3:24b、エペソ 4:15-16）ということであります。

ここでは、聖餐式においてパンを食べぶどう酒を飲むことについて、「キリストのからだを食し、その流された血を飲む」という直接的な表現が使われています。キリスト教的思想が最初から念頭にある人にとってはさほど驚くことではないかもしれませんが、初めてこれを聞く人にとっては驚愕の「おぞましい」表現かもしれません。聞きようによっては、カニバリズムの風習とさえ捉えられてしまう危険性があります。事実、主イエスご自身の発言を受けてつまずいた人々が当時いたことも福音書には記録されています。

- ・ イエスは言われた。「よくよく言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。」（ヨハネ 6:53）
- ・ 弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「これはひどい話だ。誰が、こんなことを聞いていられようか。」（ヨハネ 6:60）

この時点で主イエスは、世の終わりまで継続されるべき聖餐式を意味して語っておられたのでしょうか。もちろん、ここでは象徴的な意味で言われていたと思われませんが、象徴の中に深いリアリティを見出すことを弟子たちに求めておられたはずです。

答えの内容は長いですが、整理すると三つのポイントが浮かび上がってきます。

- ① 「キリストのすべての苦難と死と信仰の心を受け入れ」
- ② 「罪の赦しと永遠の生命を与られる」
- ③ 「主のからだとますます一つにされ」「主の肉の肉、骨の骨となり」「一つの御霊によって生きかつ支配される」

- ① 「キリストのすべての苦難と死と信仰の心を受け入れ」

まず、聖餐式が表しているもの、パンと杯が主イエスの「苦難と死」を意味するということが、そしてそれがほかならぬ自分のためであったということ「信じ」「心で受け入れる」という

ことが求められています。何も信じないでこれにあずかってはいけません。信じていなければ、この儀式はその人にとって何の意味も持たないものとなるでしょう。陪餐することによって、主イエスの受難と死に自分もあずかること、自分の罪も主イエスと共に十字架上で死んだということをしっかりと心に留めなくてはなりません。

② 「罪の赦しと永遠の生命を与られる」

儀式そのものが罪の赦しと永遠のいのちを与えるものではありません。信仰をもってキリストの苦難と死を自分のものとして受け入れた人により、罪の赦しと永遠のいのちが与えられるのです。聖餐式とは、そのことを目に見える形で、しかも体験として陪餐者に味わわせてくれるものです。

③ 「主のからだとますます一つにされ」「主の肉の肉、骨の骨となり」「一つの御霊によって生きかつ支配される」

極めて念入りに「主と一つとされる」ことが畳みかけられています。主イエスは「天」という領域におられ、私たちは「地」という領域にいる。しかし、主イエスの内におられる御霊が私たちの内にも住んでくださっている。それによって、私たちは主イエスと一つとされているのです。主イエスは、アダムがエバに対して「私の骨からの骨、私の肉からの肉」と呼んだように、「自分自身」として見てくださっている。キリストのからだなる教会として、私たちは愛されているのです。そして、主イエスのからだの一つひとつの器官として（肢として）、大切な存在とされています。

実際、体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「私は手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、「私は目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。そこで神は、御心のままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分であったら、体はどこにあるのでしょうか。しかし実際は、多くの部分があっても、体は一つなのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。《中略》あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分です。（I コリント 12:14-22/27）

主イエスが「群れ」として教会を愛し、その「肢」として一人ひとりをお愛しておられることが、聖餐式では豊かに表現されているのです。